

まえがき

石原純の新短歌を見てゆくと、その理論をも見なくなるのは寧ろ当然であろう。本来理論学者であるこの作者は、もちろん確固たる理論をもっていたのであって、そのこととは彼が大正九年に「アララギ」へ連載した「短歌連作私論」を見れば明らかである。そこでわれわれはこの論文から見なければならぬのである。ここではまだ新短歌という語を用いてはいないが、内容的に新形式の短歌を考えているのである。

また大正十一年に出版された歌集『鬢日』はアララギ時代の作品の集録であるが、表記の点で新形式を用いている。それは一首の短歌を従来そうするのが普通であったように書きくだしにせずに、数行に分けて書くということだけではない。それだけならそういう書き方をした作者は他にもいた。石原純は短歌も一つのセンチンスであるから、文章法に従わねばならないという。そこで句読点を打ち終止符をつけるべきであるというのである。これは西洋の詩を見れば当然過ぎるほど当然であることが知られよう。それとも一つ、古語を使わねば歌でないような偏見を捨てて、すべからく現代語を使うべしという主張が加わっている。

そのころ即ち大正十一年ごろから彼は新形式の短歌を実作していることは「石原純新短歌抄」に見られる通りである。そうしてその新短歌の理論を公表したのは、われわれが調べたところでは大正十二年十一月「週刊朝日」に載った「短歌の新形式について」と、これをさらに補足した「新短歌について」（同誌、大正十三年一月）が最初である。

ついでこの年「日光」という新しい同人雑誌が発足するに及んで、その有力な同人の一人であった彼は改めて「短歌の新形式を論ず」をその創刊号に掲載し、つづいて「現代語歌研究」を同誌へ数回にわたって連載した。以上五篇は最も基本的な歌論であり、いわば總論となるものである。そこで今回この五篇をまとめしておくことにした。

「日光」は寄合世帯であったから余り永くは続かず三十数冊を出して消えてしまった。発表の場を失った石原純は、今度は自分が中心となり、若い仲間たちと雑誌を発行して作品と歌論を進めて行くようになる。それらの論はだいたい各論と見てよいもので、われわれが集めることのできたのは次の諸篇である。雑誌別に記すが自然に年代順になっている。すべて昭和になってからであるから、昭和の文字を省き洋数字で年月、漢数字で巻号を示すが、巻数の記載がなく号数だけのものもある。

「三角州」

- 芸術に於ける人間的要求 (九 4・9)
- 芸術の社会性について (一〇 4・10)
- 新芸術観への転向 (一一 4・12)
- (これらは「紫花山房漫語」という見出しがついていて、固苦しい論文ではない。)

「短歌創造」

- 所信を述べる (創刊号 6・2)
- ひとり言 (一の二 6・3)
- 自由律短歌への転向者 (一の三 6・4)
- 現実の意味 (一の四 6・5)
- 随感 (一の一二 7・1)
- 新短歌形態論 (二の二 7・3、二の五 7・5)
- 新短歌壇時言 (二の七 7・8)
- 現実と超現実 (三の一 8・1)
- 振假名問題について (三の三 8・3)

「立像」

- 刊行の趣旨 (創刊号 9・3)
- 新短歌に於ける分化傾向 (二 9・4)
- 短歌に於ける技術の問題 (三 9・5)
- 詩歌の表現形態としての言語の役目について (四 9・6)
- 新短歌概念の変革 (五 9・7)
- 作品批評の態度 (六 9・8)
- 短歌の伝統性及び創造性 (七 9・9)
- 新短歌に於ける心理主義 (八 9・10)
- 芸術としての短歌のモラル (九 9・11)
- 短歌に於ける実験的工作 (一一 10・1)
- 再び新短歌に於ける心理主義について (一二 10・2)
- スタイル、フォルム及びリズム (一七 10・7)
- 新短歌概論 (第一回分を欠く、二四 11・2、二六 11・4、二七 11・5、二八 11・6、二九 11・7、三〇 11・8、三一 11・9、三二 11・10)
- 歌人協会の改組について (三三 11・12)

「新短歌」

- 新短歌の不幸 (六の一 14・1)

全体主義と組織（六の二 14・2）
芸術に於ける普遍性（六の三 14・3）

*

これらの他にも、例えば「日光室」というような六号記事のなかにも興味ある発言が見られるが、それらの目録は割愛する。

(1)

短歌連作私論

一

もう数年をかぞへるやうになる。私はいつも自分の短歌の創作に際して連作を
実行しながら、それがどんな風に進んでゆくべきかを極めやうとしてゐた。自分
の尊重するいろいろの人々からも批評なり創作なりに依り、出来るだけの機會に
於て之に對する御蔭を蒙りたいとも思つていた。併し自分の天分の乏しいことや、
自分の全生命の寧ろ僅かの部分をそれに関して傾注し得るに過ぎない生活上の事
情や、環境の大勢に支配される弱い心をもちや、そう云ふ種々の原因が、私の望
みをいくらかも実現せしめてゆかせないで、一所に停滞しゐるやうな感じを起させ
てゐた。それでも私は不斷に最初の希ひを續けてゆかうとはして居る。自分の藝
術的良心から云へば私はそれを黙つて只ひとりで信ずる様に実行してゐればそれ
で足りる筈であると思ふ。けれど自分たちと歩みを共にする人達に、自分の信ず
る處を告白して、その道の研究に資することは、吾々に取りて極めて必要なこと
であり、又相互に御蔭を蒙りたいといふ目的に一致し得るかは明らかである。此
の意味で私は現在の自分の短歌連作に對する意見を叙述して見やうと屢々思ひ立
てゐたのであるが、私の平生の時間の餘裕の尠いことや、又それを億劫がらせる
心の緩みが妨げをしてゐたのである。今でもそれに変りはないながら、敢て自分
を励ましてそれをさせるだけの意思のある或る機會をもつたのを幸ひに少し続け
て書いてみやうと思ふ。思ひ付いた儘を記してゆくので、前後の順序の適切でな
い處はゆるして頂きたい。

二

短歌連作の問題は畢竟するに短歌に関する一の形式問題に過ぎないと見做すこ
とは、表面的には誤つてゐない。形式的に見て連作といふことは単に個々の短歌
の幾首かを並列したものに相違ないからである。芸術の第一義的問題は其の價
値如何にありて、其の形式の如何には依存しないといふことも相當な主張である。
併し此論理的の二段階から直ちに短歌連作の問題を顧みるに足りないとして軽く

片付けてしまふことは必ずしも首肯し得ない處である。それは形式と内容の密接な關係を度外視した淺薄な形骸論である。ほんとうに連作のもち得る内容を想像して見ることが出来たら、そうしてそれを個々の短歌にゆるされる内容と比較して見たなら、少なくとも容易くは連作の問題を打ち消してしまふ事は出来ないであらうと思ふ。

一体個々の沢山の要素が集まつて作られたものが有する内容の一切は、既に其の個々の要素のなかに含まれて居るといふことは、無機的の集合体にも見られることであつて、しかも其の個々の要素間に相互作用の存しない場合にのみ厳密に見られるのである。相互作用のある場合には之によりて新しい關係が集合体系内にあらはれて來るといふことは当然である。況して有機的集合体では個々の要素間には全然有り得ない現象が起つて來る。連作を個々の短歌の無機的集合でなくして、一の完璧な有機的の集合体につくり上げることが出来たなら、そこに個々の短歌にもち得ないどんな微妙な生命が生れるであらうかは豫め論究することの出来ないことではあるまいか。茲に創作の神秘があることを承認するより外はない。

夫れ故に藝術的形式と内容との關係を論ずるのは、空疎な抽象的論理ではゆるされない。只實際の創作者の官能が之を経験的に若くは豫知的になすの外はないと私は思ふ。言換へれば斯うあらねばならぬ若くは斯うある筈であるといふ論ではなくて、斯様である若くは斯様でありたいといふ藝術的信仰若くは翹望に帰すべきものであると思ふ。

連作の主張は、決して独立的短歌の否定を含むものではなくて、只連作によりて生るゝ生命の肯定に止まるものであることは謂ふまでもない。創作者の藝術心に芽ぐむ様子が何れの形式を採ることによりて最も適恰なる発現を遂げることが出来るかといふ判断は、亦創作それ自らの一部に属することであつて、選擇の自由に任ずべきものである。それが為めには併し各の藝術的形式の特色を明らかにしておく必要がある。連作論の範圍は即ち其の形式の有する特長と缺点とを究めて、之に適合すべき内容の豫想を可能ならしめるにある。

三

連作は上述の意味に於て成立するものではあるけれども、私は特に連作を論ずるに当りて、此の形式が逆に其の藝術的内容に及ぼす重大な影響を見遁したくないと思ふ。実は之れあるが為めに或るのである。何故ならばその形式の選擇以前に既に固定的に胚胎せられてゐる筈の種子の性質は、実際には其の形態を形成するとき際に少くとも數量的に著しい影響を受けることを免れないからである。生物が其の生育する環境に應じて変態する事実よりは遙に大きな根本的

な影響がこの場合にはあることを吾々は常に経験してゐる。寧ろ自らに於ては一首の独立的短歌を作る場合、連作を作る場合とでは其の心理的経過に著しい相違のあることを認めてゐる。之が直接に其の内容に及ぼす影響はかなり大きいものがあると思ふ。連作を個々の短歌の單純なる集合と見做してゐる人々には此の相違は少なくとも意識的に存してゐないのであらう。そうして個々の短歌に対すると同一な態度で連作に対してゐるやうである。此の結果は連作に於ける短歌の独立性の缺乏を頻りに指摘して之が為に其の短歌としての價値を無視しやうとする様な盲目論に導かれて行つてゐるのを私は屢々見た。私は敢て之を盲目論といふ。それは藝術的價値の批判に対する一種の盲目であると思ふからである。自分で馬車馬のやうな目隠しをして、自由なる道の選擇をふさいでゐるものに似て居る。

凡ての場合に連作に属する短歌が独立的な意味を完全に具へてゐなくてはならないと云ふ様なことは藝術的批評として随分愚言があることを悟らない人があるなら、私は之を驚駭に値するまで事実であると思ふやうに速くなりたいと思ふ。独立性の要求は断じて規約的であつてはならない。独立性がない為に連作そのものの藝術的價値が不足になると云ふならば、それは其場合に限つての具體的の説明が必要である。概言的であつてはならない。斯う云ふ独立性の問題の起ることは、私は日々の考えてゐる様な一の藝術形式としての連作に対する不理解からであると想つてゐる。一首の独立的短歌と連作的短歌とに於ける創作の態度に相異すべき處のあることが理解せられれば自然に消滅すべきことであると私は信ずる。

個々の連作的短歌は各々連作の一部であることに其の特色が存するものであることは私は創作に際して自覺して居たいと思ふ。それが一首で独立の意味を完成すると否とは必ずしも意識して居ない。茲に連作の標徴があり、其の特種的生命の生るゝ所以が存するのである。一首の独立的短歌を作り終ればそこに完成の意識が伴ふのであるが、連作に於ては其の一首を作り終へた場合更に連続的に湧いてゐる創作的緊張によりて繋がれて居なくてはならない。之が漸時的に高調せられてゆく處に連作の眞の藝術的意義が存するものであると私は確信する。そう云ふ心理的経過の途に於て個々の短歌の独立性を顧慮してゐる餘裕が必ずしも必要であるとは思へない。寧ろ私は斯の藝術的怯懦に災ひされて、彼の漲つてゐる連続的緊張を弛べることがひどく虞れたいと思ふ。此の連作に対する私の態度は連作を生命ある一の藝術形式として肯定する上に於て決して謬つて居るとは考へられない。

連作に於ける斯様な心理的過程が、連作の内容を如何に色づけ得るかは大切な問題だ。私は先づこの問題から入つて更に広く連作内容の索め得る種々の特徴を探求してみたいと思ふ。

四

短歌は其の詩形の短小であるために、其の素材となり得るものゝ多くは、瞬時的事象に過ぎない。又たとへ複雑多種なる内容をもった材料があつたにしても之を一首の独立的短歌に纏めやうとするには、之を概観的に単純化していまはなければならぬ。人生のありの儘なる直観的体験の多種多様にあらはるゝ全容のなかから、或る特種のもを抜き抜いて、極めて短小なる詩形のなかに制限しながら、尚ほ豊大なる詩的價値を保たしめんためには、餘程友好なる単純化が行はれなければならぬ。之がためには短小なる刺戟によりて既に相当の感受を得るやうな材料と表現法とが考索される必要がある。是に於てか短小なる詩形は、屢々其の奇警なる内容に於て、また稀には却つてそのままおほまかなる概括的表現の縹緲たるものに於て、其の特出せる價値を認められた。私は茲に之等の詩作の不成功なる場合に於て、内容の單純に過ぎて稀薄な無意味なものを生じ、又は奇警を謬まりて嫌厭すべき悪幣を醸すことのあるのを敢て指摘しやうとは思はない。之等は今日既に芸術に志すものの普ねく戒むるを知つてゐる處であると思ふからである。私は只此の短小詩形の作者等が、之に適合する素材を、その著しく制限された事情のもので探し索めんとして、自己の芸術的体験を強ひて作為せんとするが如き態度を注意したいと思ふのである。判り易い様に例をあげて云へば或る歌作を為さん為に旅行をするといふ如きである。さう云ふ場合には彼等は疲労した眼を見張りて何か奇抜なおもしろさうな材料がないか知らぬと探しまはる。聾酔した耳を敬て、あらゆる音響を聞き通すまいと努力する犬が其の歩み過ぐる路を嗅ぎ覚えんとあせる様に各の事象を連絡のない過小の詩形のなかに捉へ入れるのに忙しさを感ずる。さうして某々途上、某々寺、某々湖などの註を附けた片々の歌が並べ作られる。斯様なおほくの歌に於ては私達の只旅行者の年月の断片的のはたらきを見るに過ぎない。彼の全人格の倂や、常住生活の姿を其処にあらはすべきことに恐らくは心を向けられてゐないのである。さうして動もすれば芸術の本体から遠ざかつた末技的技巧のみを苦慮するやうになる。之等は短小詩形の専長を利用するを忘れて却つて之に災されたものであると謂はなければならぬ。

私達の求める芸術の本体は人間生活の真相を表現する處に存する。歌はんがために或る行動を作為するといふことは大いなる誤謬であえい虚偽である。或る生活行為が既に存在して居つて、之を芸術的に觀察し表現するに於て始めて眞実の詩歌が生れる。若し世間の謂はゆる生活派なるものゝ主張が此の意に於て生活に即するといふにあるとするならば、それは私たちの意見と少しも扞格するものではない。只私はその生活行為を社会事象に限つたり若くは之にのみ重きを

おく理由を見出し得ないのである。況んや単なる社會的事象の叙述は必ずしも作者の人格的生活と密接なる關係を有たぬ点に於て、自然的事象の描写を同等であることを忘れてはならない。作者の人間的に体験せる生活行為は其の対象が彼の周圍を環る人間社會にあらうとも、其他の自然物にあらうともそれは問う處ではないと思ふ。

論点が少し岐路に亘つたやうであるが私の云はうとする處は、芸術的詩歌の素材は作者の全人格的体験に依るものでありたいといふことである。さうして独立的短歌と連作的短歌とに対し創作の際にはたらく心理的過程の相違を審かに考へ合せて見るならば、斯様な素材は極めて短小な外枠を有してゐる一首の短歌のなかに取り入れることは一般に困難であつて、之に反してさう云ふ制限のない層序的連作によりて其の表現を完了せらるゝ場合の多いことは疑ひ得ないであらう。従つて亦逆に連作的短歌によりて表現しやうと試みることは、一首の独立的短歌を作らうとすることよりも、其の素材をしてより多く全人格的に根ざすやうに育くましめる傾向を有することを私は信ずるのである。之が曩に言及した通り、詩形の選択が其の内容に及ぼす影響を見通し得ない所以である。

誤解のないやうに尚ほ附言する。旅行をして歌作をするといふことそれ自らを勿論私は排するものではない。旅行によりて新しい觸目を経験することは常習的に麻痺せる官能を刺戟して自己に内在せる諸屬性を覚醒せしめ、依りて芸術的体験を豊かにする上に於て極めて有効な方法の一つである。只それによりて歌はるべき内容に彼の生命に無關係なる觸目外観であつてはならない。謂ふまでもなく生命と事象との交渉を表現する為めの一つの要素として外観の摯実なる描写そのものも必要であると私は思ふ。それと同時に斯の外観的事象が彼の人間性に奈何に錯綜せるかを提示しなければならぬ。斯の錯綜の深ければ深い程、さうして広ければ広い程、之を容るゝ詩形を拓げる必要を痛感せずにはゐられない筈である。独立的短歌から連作へ移るの道は、此の意味に於て芸術の進歩に相当する自然的欲求に随順するものである。

五

一首の短歌と其の連作との相違は固より絶対のものではない。現に多くの人々は或る事象に接して唯一首の短歌を作りてそれで最早充分であると満足して居る場合は極めて尠ないであらう。或る者は一度作つた短歌よりも更に優れた表現を得やうとして同じ題目でいくつも作る場合がある。或る者は創作の分量を成るべく多大にしようとする単純な考から相関聯する詩材を取り入れてたくさん短歌に纏める場合がある。斯様なことを繰返してゐるうちに、其の幾つか並列された短歌の間におのづからなる調和的の味感するやうなものが生ずる。或は又其の数

首の連続によりて始める或る詩想が完全に若くは強調して云ひあらはされる場合も起るに相違ない。連作なる有機体は斯様にして生れて来るのである。嘗て伊藤左千夫の自覚的に連作を称道するやうになつたのが実際正岡子規の試みてゐた一題十首に基因することや、近く中山雅吉氏が現時の歌作を公表する際に丁度雑誌の一頁若くは其半を填充するやうに幾首かを羅列することに慣らされてゐる事情が多くの人々をして連作をつくるやうに奨めて居ると指摘してゐるのは連作が独立的短歌から発達する当面の事実を説明せるものである。或る歌人の一生の作物を通読するとき、其の人の實際生活及び思想の転移と相待つて特種の興味を起すといふことも、個々の短歌の並列のなかに自然具はれる或る有機的聯関を見出すからであつて、吾々が連作に期待するそれらの聯関の特種の場合と見做してもいゝのである。

連作と独立的短歌との隔たりは斯様に判然としたのではなく、兎も角連続的に相繋つてゐるものではあるが、上述のそれらの場合は連作として尚ほ未だ其發達を遂げないものに属してゐる。最後に述べた如き場合は連作としての意識を全く缺いてゐるので論ずる迄もない。それは丁度少しも陶冶されない原人の生活のなかに自然に備つてゐる文化的要素を発見するといふ程度のものである。又公表の形式が連作を促すといふ事実のあることも認められるには違ひないけれども、之は少なくとも其連作に対する動機に於てもつと自覚した心もちで連作を理解し之が制作を試みてゐるつもりである。連作といふものが単に形式の上からでなく、内容的に本質的に短歌に影響してゐる所以を深く考へて見た結果として、之に向はうとしてゐるのである。短歌の短小なる外殻を拡大せしめることによりて、芸術の本体を包容する自由なる領域を許容せらるゝものとして此の連作に進みたいと思ふのである。それは芸術の本体に対する敬愛なる憧憬に外ならない。さうして又偉大なる芸術に対する真摯な希求の心から外ならない。

六

芸術の本体に面接する道として広く詩歌の諸形式のなかに亘りて連作的短歌の占める價值を論断することは到底出来ないことである。私は此の論に於ては主として独立的短歌から連作へ移ることが、其此に新しい有機的聯関を生ずるといふ事實に覚醒せんことを、等しく此の道に歩まうとする人達に告げたいのである。さう云ふ自覚のもとに連作の形式を發展せしめてゆくことに対して私は尚ほ多くの望を将来にもち得るやうに思ふ。従つて私達は何故にもつと自由な詩形の創造に向はないで連作的短歌に愛着してゐるかといふことに対しては、敢て細論しやうとは思はないのであるが、併しながら此の点に就ても自ら省みて相当の理由を有つてゐる自信はある。さうしてそれは誰でも連作的短歌の有すべき内容を具体

的に詳密に考究し依りて其發展の可能を豫像することによりて自然に悟得せられ且つ強めらるべきものであると思ふ。連作を具体的に論評することは今日まで、殆ど絶対に試みられてゐないやうであるけれども、それは私の希望するあらゆる意味に於て必要であると思つて居る。

私は此の論評を試みるに先だつて誌形の自由といふ語に迷はされてはならぬことだけを豫め注意しておきたい。詩形の自由といふ慣はされた意味は、決して誌の形式を寛やかにするとか、之を無視するとか云ふことではない。只選擇に対する自由を指すのである。内容に応ずるものとして或る詩形を創造し若くは既成のものから選擇したとすれば、其の上では形式はやはり嚴として存在するのである。本来の詩歌は其の形式を無視して成り立つものではない。若し一つの形式が律動的に適恰なものであるならば、それが他の場合にも保存されるやうになるのが自然である。優秀な形式は之を充たす言語の韻律の本質と如何に深い関係をもつてゐなければならぬかを考慮するならば、現に通俗的に称へられる詩形の自由といふことに対して、餘りに放膽であつてはならぬことに氣付くであらう。

さうして多くの新形式として作らるゝ誌が律動的に私達を感動せしめる場合の甚だ少ない理由を諒解するならば形式の價値選擇に対して愈々慎重であるべき筈と思ふ。勿論詩形の選擇は其の内容に応ずべきものであつて、盲目的に踏襲すべきでないことは戒慎する必要がある。併しながら或る作者の性格に深く内在する芸術の律動は既に或る程度まで一定に色づけられて居り、さうして彼の有する語彙が韻律的に制限せられて居ることを思ふときには、却つて自由なる提示のもとに氣紛れに選ばれてゐる詩形の無意味さと、それに容易に固定的の形式に飽きて芸術を弄ぶ氣分の潜み生れてゐることを私は寧ろ感ずることが多い。

詩歌の形式は其の内容に關聯する点に於て慎重に考慮せられなければならないと共に、私は尚ほ一面に於ては一定の形式として綜括せらるゝものが存外に律動的に固定したものでないことをも言ひ添へたい。一首の短歌ですら通常五、七、五、七、七音の順序に区分せられてゐるといふことは、其の概要的の形式に過ぎないのである。其中に含まれて居る個々の語が意味の連路の上に於ても密接に五音又は七音の群を作つてゐるのが代表的の場合であるけれども、事実上さうでない場合が非常に多い。例へば

馬莫ないたく打ちてなき行きそ日並けべて見ても吾が行く滋賀にあらなくに

の如きは、最初に「馬」と云ふ二首があり、次に「莫いたく打ちて」といふ七首があり、次に「な行きそ」、「日並べても」、「吾が行く」、「滋賀にあらなくに」といふ夫々四、八、四、八音の連続がある。之を声律上異なつた群に纏めて誦するといふことの中には、沢山の紙を数へるに二枚宛又は四枚宛一緒にはぐつた度数

を以てすると云ふやうな習慣的な便宜的な要素が交つてゐて、必ずしも此処に連ねられた語の韻律の本質に因らない處もある。固より此の場合には習慣と云つてもそれは音楽理論を含んだものであることが謂ふまでもない。

音楽的波動にはそれが純粹に単調的でない限り、基本波長の外に多くの高周波長を含むでゐる。さうして尚ほそれらの種々の波長の共存の結果として謂はゆる重加調音並に減差調音があらはれる。言語の連続の本来の關係上から区劃された音群は丁度此基本波音に相当してゐる。此の群の中に於て更に個々の語の區別されるに従つて、種々の高周波音を作り、夫等のあらゆる結合によりて又重加音、減差音を生ずることが出来るのである。之等の種々の要素の相錯綜するため同一の短歌形式のなかに極めて多くの種類の律動を生じ得る所以を理解することが出来るであらう。況して短歌の連続によりて成る連作形式に於ては、其の全体に亘りて許容せらるゝ律動の多種多様であり得ることは容易に肯かれることと思ふ。私は短歌連作の形式を選ぶことによりて、其の中に私達の言語の本質に由来する自然的諧調を取り入れたいといふ外に形式の束縛を感ずることの寧ろ少ないことを思ふのである。或る意味に於ては、油繪の形式を採用する画家が繪具の不足を訴ふことがあらうとも、其の与へられた長方形の畫布のなかに安んじて自分の芸術を宿すことが出来るやうなものではないかとも思つて見る。然も一首の短歌が三十一音若くは之に近い音数に限られてゐるのに反して、連作は其任意の反覆を以てする故に、其の總量に於ける束縛を絶対に無くしてゐる。此の点に於て連作の世界は、一首の短歌の局限せられたものとは大なる相違がある。有限と無限との差別は或る意味に於て量の相違ではなくして質の相違である。さうして夫れは明かに芸術形式論上、高級なものに属することは否定することが出来ないと思ふ。

暫らく例を他の創作の場合に取つて見る。私はロマン・ローランの小説「ジャン・クリストフ」を読んで其の強大なる感銘の滲み入つてゐるものを深く想つてみない訳にはゆかない。独逸の一寒村に於ける彼の家郷に筆をおこして、彼の生れてから其の世を終ふる迄の純芸術的生涯がそこに描かれてゐる。多くの女性を対照をしてあらはされてゐる。彼の熱烈なる芸術的素質、その音楽的才能の認められない社会に対する痛切なる反抗、自らの魂に等しいものを見出してゐた親友の死に対する悲痛、音楽の不断の熱愛を以て人生の孤独を慰めたれてゆく寂しい歲月の経過、之等の間に深く織込まれてゐる人生芸術の姿はまことに絶大なるものであることが感ぜられる。それが為めには一人生を縦貫した総合的記述が必要であつたのである。思想の展開を精叙してゐる多くの頁も、詩に倦怠を催される程なのに拘らず、やはりこの博大なる輪劃のなかに全体の効果を完全に為めに取り入れられなければならなかつたのである。私はこの敬仰する人生芸術の完璧なるものの想ひを心に移して、連作に對したいと思つてゐる。それは截断せられた一肉片ではなくて生命活動の全機体なのである。濃厚に味つけられた副食物の一皿ではなくて、我々の恒常に必要とする食膳の全部なのである。味の稀薄平淡する故を以て食膳のなから米飯を取り捨てることをしてはならない。従来の独立的短歌に慣らされた人達は多くの反省を費することなしに此の態度を以て連作を批判しやうとすることがある。それはほんとうに連作を理解しやうとする所ではないと私は思ふ。味覺に對する刺戟のみを目的として選択するならそれは正当なことであるに相違ない。それで味覺の刺戟の外に身体の營養を目的とする食膳に於ては舌面に對して必要ではないと思はれるやうなものをも具へなければならぬ。そればかりではない。味覺それら自らに對してさへ或る程度まで此の刺戟を緩和することも、全体の効果の上に適當なことなのである。短歌に於てその素材の珍しさをよるこび技巧の妙に感激してゐるのは、丁度この味覺の問題に終始してゐるやうなものである。眞の芸術價値は寧ろその人生に對する意義に存することを省みなければならぬ。連作に於て之を求めようとする場合に於ては、その官能の刺戟に關して却て淡味なるものの必要なことをも諒解せらるであらう。御馳走責めに遇つて食傷してはならぬからである。斯様にして連作は強烈なる刺戟の断片の集まりではなくて、渾然として整へられた食膳の全部であり、さうして之に依りて、始めて吾々の官能の眞の満足と身体の營養とが相伴つて取得せられることも肯かれるであらう。独立的短歌から連作へ進むことは、スケッチの如き小品から、この総合的芸術作品へ移るといふことである。

平淡稀薄の要素が此の綜合のなかに必要であるといふことは、この上繰返して謂はないでもいいと思ふ。けれど尚ほ若し一言を添へるなら、此の平淡稀薄なる意は創作の容易を云ふのでは決してないことを注意しておきたい。私は寧ろ全体の効果を能くするために与かる平淡稀薄の完作をなすことの著しい困難を豫期しなければならぬと思ふ。又、ここで言ふ平淡稀薄といふことはそれ自らに於て芸術的價値のないと云ふ意味ではない。味覚的官能を刺激するといふに相当した特異な惹き付けるものを含まないと云ふだけである。

八

連作はその形式上多数の短歌の集まりから成つてゐる。そうしてそれらの短歌の一群となつたものを更に幾つか聯ねて全体を構成することが出来る。此の結構を考へて見ると、各の短歌の間には直接なる形式的連関が断絶せられてゐる。茲に連作のあらゆる特徴が存在してゐると言はなければならぬ。

一方に於て一の綜合機体としてあらはれる連作は、たとへ其の内容上に於て前節に述べた如く、或る濃醇な間隙を連ねる淡味の要素を取り入れたにしても、形式的には全く連続的に繋がり得る小説とは異なつてゐる。そうして此の点に於て戯曲が単に作中の人物の会話を以つて終始し、従つて一の舞台から次へ移る間に全く連関の断絶せられてゐるのと著しく似た處ともつてゐる。私は併し此の断絶が有効に用ゐられたときには、贅言を省いて内に齎されること、又對照、調和の美を現出するといふ非常に好い結果を齎らすことが出来ると思つてゐる。そうして之が連作の他の長詩形式に対しても一つの長所として挙げる事が出来る。前の平淡の要素を取り入れるといふことと、此の贅言を省くといふこととは適切に相調和して、連作の内容を整へることに向けられねばならない。

一首の短歌にも詞書きをつけるとおもしろくなるといふことは多く云はれたことである。故長塚節氏などは特に之を主張せられたのであつた。この詞書きといふものは歌の背景を説明したものであつて、丁度戯曲に於てもそれと同じ形式が取られてゐることは謂ふまでもない。実際の演劇においては舞台面の背景などが此の役目をなして居る。私は連作に於てはこの詞書きを或る程度まで、其の内容に取り入れて、そこに背景を滲み出させたいと望んでゐる。そうして之が成功せるものを、詩として寧ろ發達させるものであると考へてゐる。前に述べた人生芸術の綜合せる機体といふことに、より近づいてゆくことを思ふからである。

詞書きをなるべく多く叙して、その後に残り残された濃醇の甘液のみを短い韻律に聯ねるといふことも一つの主張であり得る。私はそう云ふ種類に属すべき独立的短歌を決して否定するものではないことは屢々言つた。併し之は畢竟強列

なる刺戟のみに酔はうとする遊樂的態度に近づくものであることを反省しなければならぬ。若しくは特異なる行為を選んで大向うの喝采を博さうとするやうな、芸術上の墮落に陥る危険が伴ひ易いことをも忘れてはならない。私は連作に於て之が無いとは思はないけれども、連作はもつと大きな深い人生芸術の見地の上に立脚し得ることを信じてゐる。あらゆるものを包容して融合調和の極致を示せる自然の博大をさへそのなかに創造することも出来る。少なくとも此の方向に連作をして發達せしめたいことは私の強く希望する處なのである。具体的問題として詞書きにあらはす様なことを連作のなかに取り容れることに關してはかなりの苦心を要することと思ふ。實際の創作に際して、之を戯曲に於ける場合に比較して、それに依りて暗示を得ることも出来るやうな気がする。此の問題に關しては沢山の具体的研究が必要であることは謂ふまでもない。

九

短歌連作の实例を具体的に思ひ浮べる毎に、私は先づ齋藤茂吉氏の「死にたまふ母」を思はないことはない。そのなかには自分に最も近い肉親の死に対する悲痛と、此の悲痛に陥つてゐる人間に対し、その周囲のあらゆる自然がはたらきかける刺戟の鋭さとが種々の形に於て表現されてゐる。それを讀むでゆくと啻に悲哀に対する同情が湧くと云ふことに止まらないで、もつと複雑な人間の精神作用の機微を考へさせられる点に於て、其の内容の深さの驚くべきものがある。此の深みは茂吉氏の諸作に共通なものであつて、氏の作品をして淺薄なる現代の多くの誌扁のなかに独り深く湛へしめる所以であるには相違まいが、此の「死にたまふ母」にありては、それが連作形式を取ることによりて、最も遺憾なく有効にあらはれてゐることを切實に感じない訳にはゆかない。只一首の短歌で斯れと同一効果あるものを作らうなどと云ふことは夢想することすら出来ない。又これを長詩の形式に作りかへたと想像したならば或は卓越せる技能者にはそれは出来るかも知れない。併し個々の離れた短歌を連ねてゆく間に、その頻々として繰返される間隔の沈黙のなかに、如何に神秘なる連絡が挟まれてゐるかを思ふとき、連作短歌の形式の特長が斯様な内容に恰適する所以を理解することが出来るであらう。同時に連作短歌が他の長詩形式のなかに、其の独特の地歩を占め得らるゝ理由に首肯することも出来るであらう。

勿論或る一つの可能性は、言語に与へられると共に先驗的に豫知せらるべきことである。併しその詩形の適否は、極めて概要的なものを除くの外は、理論でなくして、具体的作例の存否如何に依るものである。此の意味に於て私は連作短歌のために「死にたまふ母」のあることを力強く思ふのである。私は今連作論の立場から此の作を精細に批判して見たいと思ふ。それは此の尊敬する作品に対して

何物をも加ふ為めでもなく又損ふつもりでもないけれども、之によりて私の翹望してゐる連作なるものを幾らかでも具体的に想描させることが出来れば幸であると思ふからである。

十

連作を批評するに当りて先づ最初に論ずべきことは全篇の色彩基調及びその高低の変化が、内容と如何に相對して効果を示してゐるかと云ふことである。之は独り連作に限つたことではなく一般の芸術批評に於てなさるべきことであるけれども、特に連作に於ては其の全結構が大体に於て同数音の短歌の反覆に依りて代つてゐるから、其の間に於ける基調の変化が特種の方法に依りて強調されてゐることに注目しなければならぬ。それは即ち個々の短歌の間に存する沈黙間隙の意義を諒解することによりて肯かれるであらう。

個々の短歌間の沈黙間隙は、其の前後の關係に依りて大なる場合と小なる場合とがあり得る。充分にものを言い切つてしまつて其後多くの餘韻を残すことを必要とするときには此の間隙が従つて大きくならなければならない。之に反して少し言ひかけて、又次の短歌で之に直ぐ言ひ続けてゆきたいときもある。此場合には中間の黙止は小さくなければならない。此間隙の意義は之を決して過小に見積つてはならない。形に表はれてゐる言語の声律と相待つて、沈黙の韻律の効果は決して尠くないからである。丁度對話の中途に黙した顔を見つめてゐるやうなものであらう。夫れ故に一個の短歌が其の前後のものと幾何の沈黙間隙を保つて相離れてゐるかと云ふことは、只上述の意義に依りてのみ適否を判断せられなければならないことなのである。若し夫れが極めて小さい黙止を隔て、密接に關聯すべきものであつたならば、其の關聯せる二つの短歌に相待つて始めて一段落の詩想を完成すべき筈である。さうしてそれらがたとへ形式的に独立しないやうに見えても連作に何の煩をなすものでもない。私は茲で連作中の短歌の独立性のみを氣にして迷つてゐる人達にもう一度反省して見ることを御薦めする。それは従来の短歌といふ概念から出發してゐる固陋なる考へではないであらうか。若し連作といふものを最初から一詩形として肯定して行つたなら、其の一節を作る部分の独立性などを抽象的に論ずるのは、芸術論上に無意義のことではなからうか。独立した方がいゝか悪いかは芸術的效果によりて判断されなくてはならない。さうしてそれは抽象的に論ぜられたものではなくて、具体的にのみ批判されなければならない。私は之等の人達に此の独立性云々の無用の論議を止めて、もつと徹底的に連作結構の本質に就て論ぜられんことを期望する。短歌間の沈黙間隙に関する上述の論は恐らくは此の點に關して幾分の諒解に資するであらう。

詩想上の沈間隙は連作短歌の個々の間にのみ限られたものではなく、其の一首の短歌の内部にも存在し得る。上句と下句と相立して其此に間隙を保つてゐる場合は多く見る處で、一首の或る餘韻を含ませることの爲めに極めて有効に用ゐられて居る。連作にありては此の一首中の間隙と、前後の短歌に対する間隙とが適宜に案配せられることが必要である。叙述の順序の顛倒といふ様なことも、此に加はつて、多くの複雑な変化を其処に具へて居ることを思はなければならない。

連作形式の批評に於て次に心掛くべきは、無いように対する表現の繁簡の程度如何何といふことである。稀薄なる内容に対して多くの言葉が費され過ぎることは最も厳に戒慎すべき處である。特に従来の短詩形たる一短歌に於て發達し來つた表現の緊密さが、連作に移ることによりてその優秀なる一特長としてくゝられる代りに、之を容易く失つたとしたならば、それは短歌連作に取りても最も遺憾なる事実でなければならぬ。多くの人々が連作に躊躇する所以が此処にあるとするならば私はそれを諒としないでもない。独立性云々の論も、要は一首の独立が表現の緊密を保つに都合がいゝと云ふ方法論若くは技巧論に帰着すべきものであるとも考へてゐる。併しながら単に之等の故を以て芸術制作上に不自然なる羈束を自ら超えまいと努めることは芸術欲求に対する勇氣の足りないものであることを私は信じない訳にはゆかない。只連作内容の漫りであつてはならぬことに関して、私の批判の標準は決してそれらの人々の下にあるものでないことを思ふ。連作は一短歌の特長を失はないで、只それ以上の綜合的有機的内容を附興したいといふ要求に生れたものであることを強く意識してゐるからである。

十一

「死にたまふ母」は四章五十九首の短歌から成つた一連作である。其一における十一首に母の危篤を聞いて東京を立つて故國なる山形に赴く迄を歌つたものである。後章に於ける神秘的傾向をもつた詩想に对照して此の章は尚ほ現実的に色づけられてゐることは全体の結構から見て甚だ自然であるやうに感ぜられる。併しながら其の現実著しく危虞のまへに動揺せるそれである。第一首の

ひろき葉は樹にひるがへり光りつゝかくろひにつゝしづ心なけれ

は充分に此の心もちを暗示してゐる点に於て、此の連作の劈頭に置かれるのに最も適したものと謂へる。此に表はされたものが連作の第一首としてあるが爲めにどんなに深い意義を持たされてゐるかを思つたなら之を引離して一の独立の短歌と見たときと随分大なる相違のあることが解得されるであらう。翻つてゐるとき広き葉は此処では単に無心に見られてゐるのではない。母の生命を氣遣つてゐる不安の眼のまへに対してゐるのである。その葉の光つたり陰つたりしてゐる動揺

は母の軽からぬ病の消長をひたすらに思つてゐる心に向つて現はれてゐるのである。之等の連作に於ける如く、却つて此等の事情を暗示せる發頭として味つた場合との相違をも考へて見る必要がある。前者に於ては母の病といふ事情が背景として吾々の頭に沁み込むに過ぎない。さうして母の病を思ひながら下界に対して感ずる瞬間的の心もちが其の全内容を作つてゐる。之に反して後者に於ては此の

不安を感じてゐる作者の心理的経過を連續的に追隨して母の病に対する種々の

感想を展開してゆく最初の序述として見做される處に特種の芸術的生命を負はされてゐることを見過してはならない。

白ふぢの垂花ちればしみじみと今はその実の見えそめしかも

之は僅かなる黙止を隔て、直ちに第一首に連続するものである。藤の実の見えそめたと云ふ事實に、追憶的感慨を思はせるものであるけれども、私は此の歌に於て第一首の動揺に対して稍々沈靜的に過ぎてゐる感をもつ。同じ沈靜であつても今少しく心の動揺を暗示して第一首の餘韻を之れに及ぼして置たかつたと思ふのである。之と次の三首との間に稍大なる黙止がある。

みちのくの母のいのちを一目見んとぞいそぐなりけれ

うす日さす都の夜に灯はともりあかかりければいそぐなりけれ

ははが目を一目を見んと急ぎたるわが額のへに汗いでにけれ

最初の二首に景情を述べた後に、此の三首に移る處は自然的でいいと思ふ。道を急ぐといふことを三首繰返してゐるのも焦慮の念の止み難いものをあらはして居ていい。殊にその一は母を見んといふ抒情を率直に云ひ、次は外境を叙し、最後に再び母を見に行くと繰返しながら自身の急ぐ様を述べてゐるのは、其の配合の極めて自然に協うてゐることに感嘆せずにはゐられない。「いそぐなりけれ」と「いそぐなりけれ」との微細なる相違の如きも注意して見る必要がある。連作論としては關係のない餘論であるが私は「あかかりければ」と云ふ感を心理的に追従することに稍困難を感じる。一寸気になるので附言する。

灯しあかき都をいでてゆく姿かりそめ旅とひと見るらんか

停車場の混雑のなかに入つてゆく處を此の一首で済ましてゐる連作的技法を私は注意する必要があると思ふ。前掲の道を急ぐ歌は三首なくてはならないのでそれを省いて一首にしては足りないのである。急ぐ急ぐと餘計に云ふことが大切なのである。さうして停車場のなかなどを見廻してゐる餘裕はないのである。ただ大勢の人が行くなあと目に止まるだけである。自分一人で考へてゐる沈黙間隙が必要なのである。さうしてその餘韻を充分に隔て、続いてゆく。

たまゆらに眠りしかなや走りたる汽車ぬちにして眠りしかなや

吾妻やまに雪かがやけばみちのくの我が母の國に汽車入りにけり

朝さむみ桑の木の葉に霜ふれど母に近づく汽車走るなり

沼の上にかぎろふ青き光よりわれの愁の来むと云ふかや

汽車のなかで眼ざめて又母を思つてゐる。汽車がずんずんと近づいてゆくに連れて不安が餘計に湧いて来る。そう云ふ有様が此の四首と痛切に現はれてゐる。私は之に一首足しても減らしてもいけないと思ふ。

上の山の停車場に下り若くしていまは鰥夫のおとうと見たり

帰旅の章を此の一首で終りにしてゐる。此歌が平気な叙事の形を採つてゐるのは特に注目に價ひする。それはやがて第二章に於ける心の叫びを湛へ藏したものであるからである。「弟見たり」の短い言の中に其際の無限の感慨を暗示してゐる。之と同時に弟の境過を表はして居る表記の緊密は驚嘆すべきである。

(一三の六)

十二

「死にたまふ母」其二は病篤い母の側に侍してゐる間の感想をその儘に歌つたものである。久しぶりに帰つて相見た慈母と、之を遶りてゐる自分の故郷の諸物に対する云ひ知れぬ懐かしきのなかに、相交錯して、人間の生命の死にゆくすがたを見つめることは、人生に於て遭遇する最も厳肅なる瞬時である。この厳肅な悲痛な感にふさはしい莊重な作者の語は、之に接するものをその境地に惹きいれねば止まない衝迫をもつてゐる。

はるばると薬をもちて來しわれを目守りたまへりわれは子なれば

寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何か言ひたまふわれは子なれば

此の二首は是非とも続けて読む必要があるもので、その中間には極僅かの黙止しかないものと見なくてはならない。最初の「はるばると薬をもちて來しわれを」といふ句が、第一章の旅中の作を承けて、此の章の始に置かれてゐる効果を深く味ふ必要がある。それから此二首には同じ語が沢山繰返されてゐる。「吾を目守り」、「言ひたまふ」、「われは子なれば」が二つ繰返されてゐる。それにも拘らず少しも重複の感を起さないのは、注目しなければならぬ。私はこの繰返しが、かなり年老いて、さうして病み果ててゐる母の面目をよく間接に現はしてゐることを切実に感ずる。「われは子なれば」といふ繰返しは限りない親しさを思はせる。

長押なげしなる丹ぬりの檜に塵は見ゆ母の邊の我が朝目には見ゆ

山いづる太陽光を拝みたりをだまきの花咲きつづきたり

母の病に侍する間にも外の事物が眼に入らない筈はない。さうして同じ事象でもふだんと異つた意味で感受してゐるのである。丹ぬりの檜に塵が見えるといふ単なる事柄は、母の病状に夜を明かしたその子の眼には複雑な連想を伴つて映つてゐるのである。太陽光が山から出るといふことも、母の生れて、さうして死んでゆく故郷の天地に於て深い意味のあることに相違ない。その太陽光をいま拝ました度ましい心は、やがて母の死に對かほうとする厳肅なる心なのである。苧環の花も無心にそこに咲いては居ない筈である。私は之等の感想を具象的な背景として歌つてゐる連作の特徴をよく悟つてもらひたいと思つてゐる。此の二首が連作中に置かれてゐるためにどんなに複雑な意味を現はしてゐるかを能く玩味してもらひたいと思ふ。「山いづる」の歌を只一首取り離して見たら恐らくは何の連絡もないことを無意味に並べたとも見られるであらう。丁度私達の手から指を一本切りとれば、それは死んだものになるのと同じ様である。連作のなかに有機化さ

れて、さうして生きた血が通つてゐるのである。そればかりではない。此の連作の中にさう云ふ背景を滲み出す歌があつて始めて作者の感想の全体を具象化して渾然とその佛をあらはすのに役立つてゐるのである。連作結構の上から見て私はもう一言茲に云ひ添へる。「長押なる」の歌も「山いづる」も共に前後二段に切れてゐる。併し前者では「塵は見ゆ」の次に小さな黙止があつてすぐ続いてゐるのに反し、後者では「拝みたり」の次に大きな黙止があつて前後まるで別なことを云つてゐる。此黙止は右の二首の間に存するものと同程度のものと見られる。連作は技巧論上からは此の「山いづる」の一首が上句下句とばらばらに離れ過ぎてゐるといふことは、それ自身では問題にはならないので、只大きな黙止を短歌一首一首間におくと同じ意味で其中間にも置いたのが、全体の音調の変化をどれ程有効にして居るかといふことに聯関して論ぜられなければならないのである。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたりといひにけるかな

春なればひかり流れてうらがなし今は野のべに蠅子も生れしか

母の生命と自分の若い生命との錯綜をあらはしてゐることは私は之等の歌に痛感する。桑のただよふ香に堪へないで母を呼んだといふこと、母が目に寄りて苧環の花が咲いたと言ひ聞かせたといふこと、それらは限らない親しみを以て自分の若い心情を死に近い母に注ぎ分たうとするものではあるまいか。さうした自分は一しんと深けた夜に蛙の声を天に聞いてゐる。春の光の流れる野に小さい命を以て蠅子の生れることを想つてゐる。この若い芸術的感情の所有者が生命の神秘に就て深く瞑想してゐる姿を私はこの歌に思はずにはゐられない。さうして私はそれにつけても斯様な連作が内容的に有し得る深みに思ひ到らない訳にはゆかない。

死に近き母が額をさすりつつ涙ながれて居たりけるかな

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蠶のねむり

前の歌は率直に母を看護つて涙をながしてゐることを言つてあるので、それが此処に挟まれてゐるのに私は少からぬ興味を覚える。平凡な作者になると斯う云ふ直接的な歌ばかりを並べてしまつて、自分の深い隠れたものと周囲との接觸を感受し得ないから、皆干乾びた骨々しいものにしてしまふ。「死にたまふ母」の作者はその著しい鋭い芸術的感受性をこの悲しみによりて尚ほ發揮しながら、あらゆる潤沢な感想を抱いてゐる。さう云ふ深潤な人性のなかに、止み難い卒直さのあ

らはれを見るのが私には感深いのである。私はさう云ふ意味で此の歌を注視する。併し此の卒直な現実の姿から作者はまた直に神秘の世界に戻つてゆく。生命の死といふことの不思議が痛切にその頭脳を去らないからである。「蠶のねむり」それも生命進展の一現象であるのに、自分の母はいま死のねむりに就かうとしてゐる。私は此の第二首を読むで再び生命に対する痛感を強ひられる。

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まれ乳足らひし母よ

のど赤きつばくらめふたつ梁にゐて足乳ね母は死にたまふなり

いのちある人あつまりて我が母のいのち死ゆくを見たり死ゆくを

「母が目をしまし離れ来て」といふ歌に続いて母の死の現実にせられた歌が來ることにも私は或る意味を偶してゐることを感じてもいいと思つてゐる。母の嚴肅なる死はここに遂に免がれない運命となつてその子を見舞うた。それに出遇うた利那の心の乱れが「死にたまひゆく我が母よわを生まれ乳足らひし母よ」の破調になつて表はれることは恐らくは最も自然の形である。此の乱れた心をたとへ一時は疑つたにしても母の死はやはり事実なのであつた。「のど赤き玄鳥ふたつ梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり」限らない静肅にかへる神秘をそこに見ることが出来る。併し生に対する愛着は盡きない。「いのち死ゆくを見たり死ゆくを」此の死ゆくをの繰返して云はねばならない心理を私はそのまゝ見通してはならないと思ふ。

ひとり來て蠶のへやに立ちたれば我が寂しさは極まりにけり

すべての世の終りに於ける寂しさである。斯の章を終る歌として私は之に充分の餘韻を感じる。

十三

其二に於て母の死の悲痛をうたつた作者は其三に於て之に続く葬の寂しさを叙してゐる。

榎わか葉照りひるがへるうつつなに山蠶は青く生れぬ山蠶は

日のひかり斑らに漏りてうら悲しい山蠶ははまだ小さかりけり

母の亡き骸を守りて葬りにゆく日である。途すがら山蠶を見てゐる彼の人生のもつとも深い悲しみを心にじつと抱いてゐるのである。此の叙述のなかに藏された意味深さを私は連作に於て始めて見ることが出来ると思つてゐる。

葬り道すかんぼのはなほほけつつ葬り道べに散りにけらずや

おきな草口あかく咲く野の道にひかりながれて我ら行きつも

葬りにゆくことをこの處で示してゐるのはいい。最初の歌に只「我ら行きつも」といふだけで二首相待つて充分にその意味をあらはしてゐるのは連作を能く利用したものであると思ふ。但し慾を云へば前の歌の初句の「葬り道」は第四句の同じ語に対しては或は無用の重複になつてゐはしないかと感ぜられる。此初句に他の意味の語がおかれた方がよくはないかと私は思ふ。又次の歌の「ひかり流れて」といふ疑がある。何となしに私はびつたりと共感せられないで、何かしら餘計の感想が挟まれてゐるやうな氣がする。之は作者に直接に訊ひてみたいと思つてゐる。

わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし

星のある夜ぞらのもとに赤あかとははそはの母は燃えゆきにけり

さ夜ふかく母を葬りの火を見ればただ赤くもぞ燃えにけるかも

「我ら行きつも」から此三首へ移る間の大きな黙止には感情の沈潜とその中に隠る複雑なうねりとがあることを想はねばならない。連作を読むにはさう云ふ沈黙の間隙を存分に想描して次の歌に移る用意が要る。

はふり火を守りこよひは更けにけりこよひの天てんのいつくしきかも

火を守りてさよ更けぬれば弟は現身のうたを歌ふかなしく

ひた心目守らんものかほの赤くのぼるけぶりのその煙はや

葬り火に対して盡きない感情をあらはすために沢山の歌数がここに並べられる必要があると私も思ふ。更けゆく夜空に赤々と燃ゆる火を眼に描くとき、あらゆる語は之を歌ふがために用意せられたものであることを作者は思はずにゐられないであつたらう。

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり

露の葉に丁寧こつがめに集めし骨くづもみな骨瓶こつがめに入れ仕舞ひけり

葬り火の夜は明けて再び朝となつた。併し自分には異つてみえる朝なのである。母に残されてひとりとなつた寂しさを感じる朝なのである。茲に当然調子の変化がなくてはならない。私はこれだけの感じをもつて此二首に對かふとき幾らかもの足りなさを覚える。「母をひろへり」といふ語のしつくりとしない惜しさもある。「露の葉に丁寧こつがめに集めし骨くづも」といふ處が稍くどい説明に傾いてゐる嫌も混つてゐる。ともかく此二首はこの連作中でいち番もの足りないものであるけれど、或はそれは止むを得ない瑕瑾であるかも知れない。

うらうらと天に雲雀は啼きのぼり雪斑らなる山に雲ぬず

どくだみも蘇の花も焼けりたり人葬り處のあめ明けぬれば

作者はやはり偉力をもつてゐる。葬を終へた天地の静けさを莊重にあらはすことによりて此の章の結末をこれ程落ちついたものにし、さうして次章の哀々として盡きない餘感に連らしめてゐることを考へて、私は此の二首を単独な意味で読過することは出来なかつたのである。

十四

「死にたまふ母」其四は二四首の歌から出来てゐて全篇の結末をなしてゐる。母の死をうたひ、その葬送をうたつた作者は、茲にその凶事のゆゑに昂まつた悲痛のこころを自ら慰める静寂の境をうたつてゐる。現実に即しないこの多くの悲しい歌は、我が齋藤茂吉氏がどんなに若い純真なところをもつて、おほきな自然のなかにその生命の神秘を守つて生きようとせるかを思はせられる。「死にたまふ母」が現実以上の廻かに崇高な感じをもつて私たちに迫るのは此の故であると私は信ずる。さうして此の終章はこの連作にそれだけの意義を完成させるのに充分に成功してゐる。

かぎろいひの春なりければ木の芽みな吹きいづる山べ行きゆくわれよ

ほのかにも通草の花の散りぬれば山鳩のこゑ現なるかな

山かげに雉子が啼きたり山かげの酸っぱき湯こそかなしけれ

酸の湯に身はすつぽりと浸りゐて空にかがやく光をみたり

山かげの酸っぱい湯がどんなにか神秘なはたらきを以てかなしみの子を浸してゐるかを思つてみるがいい。空のひかりも山鳩のこゑもさう云ふ心にはしみじみと悲しまなければならぬ。

ふるさとのわぎへの里にかへり来て白ふぢの花ひでて食ひけり

山かげのに消のこる雪のかなしさに笹かき分けて急ぐなりけり

時節も遅くめぐり来る北國の郷里に、母に訣れたかなしみの今新しく襲つてくることの切なるものがあらはされてゐる。

火の山も麓にいづる酸の湯にひと夜ひたりてかなしみにけり

ほのかなる花の散りにし山のべを霞ながれてゆきにけるかも

火の山も酸の湯も奇しいこころを湧かせる。ほのかな春である。

はるけくも峽の山に燃ゆる火のくれなゐと我が母とかなしき

山腹に燃ゆる火なれば赤々とけむりはうごくかなしかれども
言々哀調を綴りて強く迫るものがある。

たらの芽を摘みつつゆけり寂しさはわれよりほかのものとかは知る

寂しさに堪へて分け入る我が目には黒ぐると通草の花ちりにけり

「寂しさ」人間のいのちは寂しい。通草の花がくろぐると散つてゆくのに見止まるころは、深刻なかなしみを嘆くそのひとの唯りもち得るものである。

見はるかす山腹なだり咲きてゐる辛実の花はほのかなるかも

藏王山ざわうざんにはだら雪かもかがやくと夕されくれば岨ゆきにけり

しみじみと雨降りゐたり山のべの土赤くしてあはれなるかも

遠天をながらふ雲にたまきはる命はなしと云へばかなしき

無心な自然に見入りながら自分にきはまる悲しみをもつて、それらに或る交渉を求めやうと焦せる姿が之等の歌によくあらはれてゐることを私は深く感ずる。この連作を読み味はふとする人は斯様な意味を充分に省察しなければならぬ。さうして只一首の独立な短歌でこれ程な複雑な深甚な内容が果して遺憾なくあらはし得るかどうかを落ち着いて考へてみるがいい。芸術の深みを翹望する人々はもつとよく連作に就て考慮する必要がある。

やま峡かひには日はどつぷりと暮れた今は湯の香の深かりしかも

湯どころに二夜ねむりて蓴菜を食へばさらさらに悲しみにけれ

やはりすべてが悲しみにいろいろどられてゐる。

山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははその母よはその母よはその母よ

「ははその母よはその母よ」それはひとり此の歌の結句ではない。この連作全篇を結ぶ語である。さうしてこれが限らない餘韻をもつて力よく響いてゐることを思ふとき、私はこの連作に対して更に讚美の語を惜まうとは思はない。

十五

連作にはその中に沢山の短歌が連ねられ、ば連ねらるゝ程、之を統一するだけの強い感動が必要である。感動が全体を引き緊めるに足りないとすぐに粗漫な嫌悪を起すものである。連作中の歌数の多寡は此の省察によりて適当に決められなければならない。多くの連作の弊は徒らに言葉のぼせ得る短歌を並べ連ねて感興の冗費と停滞とを促がす處に生じ易いものである。一首の短歌が其の語数の制限があるがために比較的緊密なる表現をなすのに利せられながら、其の連作に於て失敗するのは、多くは此の弊を矯むことに蔽でないたためである。併しながら之が為めに連作の芸術的価値を無視しやうとするものがあつたならば、それは謬まつ

て傷つくことを恐れて、先づ自からの生命を絶たうとするにも等しい愚昧である。否、芸術の真に対する冒瀆である。自分の技く、>の到らないといふ遜つた心から一首の短歌の制作にのみ従はふとするはいい。自分に湧いた感動が個々の短歌に充たされるに最も適することを自覚して之を作ることに専らであるのはいい。けれど連作の主張はそれらとは独立な芸術的希求から成立つてゐることを肯定しなければならぬと思ふ。此主張を拒む権利は何人にも許されてはゐない。そればかりではない。恐らくはすべての短歌制作者は自分たちに觸接せる複雑なる事象に深く観入して、人間の心理の極まりなき錯綜を感じるとき短歌の形式を拡めて連作に到達する事に、最もおのづからな至当な意義を見出さずにはゐられないであらうと思ふ。

私は「死にたまふ母」を解説して作者の感動が六十餘首の短歌を連ねた此の大作を纏めるに餘りがあつたことを深く思はねばならない。此の連作の中心に貫かれてゐる死に対する悲痛と生命に対する神秘の感情とが個々の事象に觸れて具象的に表はれてゐる處にその連作としての深遠な芸術的價値を認めなければならぬ。いことは勿論であるが、其の感動の熾烈さを歛いたならば其の魅力を恣にすることが出来なかつたに相違ない。私は思ふ。作者は最初から之を尠大な連作にしやうといふ企畫を野心的に包藏してゐたのではない。作者の止むなき感動が盡きずに湧き漲りて彼の衷言をひたすらに続けさせたのである。私はまた思ふ。夫れ故に「死にたまふ母」には心のおのづからなる推移に従つていちづな併し芸術的に溢れ動いてゐる生命の姿が断続的にあらはされてゐるのである。私は此の種の情熱を中心とする連作を作るに當りて此の機微をよく悟らねばならぬことを深く感ずる。企畫に指導される代りに感動に追隨しなければならぬ。

連作の作例に近い處に探めて私は更に古泉千樫氏の「向日葵」(アララギ、第十一卷九号)を見出し得ることをよるこぶ。それは十八首の短歌を連ねて、向日葵のさく夏の日に勤め帰りに街を歩みながら自分の物質的生活を省みた度ましいところを歌つたものである。私はそこに複雑な現実的世相の背景がよく現はされてゐることを多とするのは勿論であるが、此の作をほんとうに意義あらしめるものに、作者が自分の裕なる生活に不安を感じながら、その親しい家族のなかに云ひ知れぬ懐かしみを以て接してゐる慰めのところを具象せる處にあると思ふ。

日ざかりのちまたを帰るひもじけど勤めを終へてただちに帰る

晝ふかくま日照りつくる大通りただに静けし吾れはあゆむに

此の連作の起章としてなくてならぬ歌である。之等を一首づつ離してそればかりを見たら、餘り平凡過ぎるかも知れない。併し連作としてはそんなことは問題ではない。寧ろこの平易な叙述のなかに既にたくさんの暗示があることを味はされる。「日ざかりの静かな広いちまた」。それは彼が日毎に通ふ道である處は彼の生活に或る交渉をもつてゐなければならぬ。彼はそこを通る道すがらに自分の勤めを思ひ自分の家を思ふことは一再ではないに違ひない。「ひもじけど」それは当りまへの言に過ぎないけれど、生活に煩はされてゐる心にはやはり痛切な沈思を伴はずにはゐられないのである。勤めを終へて「ただちに」帰ることを意識していふなかに家にむかふ親しさを湛へてゐると解せられる。之等のことは連作であるがために彼の歌と相俟つて味はれるものであることを私は特にここに明らかにしたいのである。

深川の八幡の祭のびけらし街のかざりを取りゐる真晝

米たかきさわぎひろがれりこの街の祭にはかに延びにけるかも

祭のびし街のまひるのものゆゆし大き家々おもて戸ざせる

この街のまつり延びにけりそろへ衣きたる子どもの群れつつさびし

祭礼が延びて街のかざりを取り外してゐるといふのも、大きな店家が真晝に戸ざしてゐるのも揃へ衣を着た子供たちが空しく群れてゐるのも、皆ほんとうに寂しいけしきである。深川八幡の祭礼の賑はしさを知つてゐるものには殊にその俄に延びたゆゆしい寂しさを思はずにはゐられない。しかもそれは米價の騰つたために勃発した騒擾によつたものである。作者はこのただならぬ寂しさを見て其の不穩のなかに生くる自分達のことを深刻に思ひみない訳にはゆかなかつたのであらう。

日のさかりこの川口に満ちみつる潮のひかりに眼をあきあゆむ

まひるの潮満ちこころぐし川口の橋のたもとの日まはりの花

前の四首の歌が街の有様を叙べてゐるのを承けて、やがて大川口に歩み出たときの作者の感觸がここにうたはれてゐる。人間の世に充ちてゐる不穩さに対して自然に眼を移すことの出来たほつとした氣分が最初の一首に伺はれ、さかりなる日をうけて潮が眩しく光つてゐる。それは真夏の宏壯なる趣であるけれども橋のたもとに見つけた向日葵の花に生活に疲れたこゝろを以て立ち向ふときには蘭なる日のなかに暗い陰を見ないわけにはゆかない。連作の調子が一たび強まりてまた緩むでゆくことを感じなければならぬ。

大きな葎くろぐろと立てりけりま日にそむける日まはりの花

大きな花ならび立てども日まはりや疲れにぶりてみな日に向かず

みちを歩み続けてゐる作者が向日葵の花に見いりてゐる姿はそこに或るふかい暗示を感じしめるものがあるからである。日に向ふ性質を具へてゐると云はれてゐる花が日に背いて黒い葎をもつて居る。人間が生活に疲れたときに抱くもろく／＼の感想は果たしてその素朴なる性をゆがめることがないであらうか。作者は恐らく向日葵の花を見つけて無心には見過ぐし得なかつたのである。

満ち倦める潮のひかりのいらだたし真晝の長橋わがわたりゆく

秋づきて暑きまひるの地上のもの緑はなべて老いたるらしも

疲れたる心には倦怠がわく。眼に觸れるものにその表はれのあることを作者はなほここに歌つてゐる。潮の満ちゆるびてゐるのに焦だたしさを感じるのも、緑の草のくろぐろで見えるのもその同じところからである。私は此処の「秋づきて」の歌に於ける連作中に或る異色を感ずる。それは果して最も適切なものであるかどうかを判断することを私はここに差控へるけれども、外景の描写から次の歌の稍主観的な色彩に移らうとする間に置かれてゐることに、或る意義をもつてゐることを認めなければならぬ。

異國米たべむとはすれ病みあとのからだかよわき児らを思へり

自分が觸接する周囲の情況が此の感想をもつてゐる自分に対してゐる間、何等かの交渉をもつてあらはれてゐるのである。勤め帰りのひもじさも、米たかき騒ぎも、又祭の延びた寂しい街も、潮のひかりも向日葵の花も此の思ひをもつて見られてゐるときに、作者をして人性について深く感ぜしめないわけにはゆかない。「向日葵」の連作を読んで此の一首に到るときに前のすべての歌が、更に背景づけられた深い意味をもつて記憶に蘇つて來る筈である。此処に連作が複雑な内容に色づけられ得る所以が理解せられるであらうと思ふ。尚ほ此の歌平易な言つきもののなかに家庭の事情をよくあらはし得てゐるのがいい。感傷を云はないでしかも児に対する愛憐と生活に対する憂慮を極めてよく表現してゐる。

日輪はひたかがやけりまひるの空かすれかすれの雲はうごかず

空をあふぐのは心の屈托を忘るゝ所以である。太陽がじつと赫いてゐる。無心なかすれかすれの雲がそこに靡いてゐる。それを見てゐながらそこに或る慰安を握つたやうな作者のところが之に暗示せられてゐることを私は思ふ。

炎天にあゆみ帰れりやすらかに妻子の顔を見ればかなしも

疲れやすき心はもとな日まはりの大き黒葢眼に仰ぎみる

慰安、それはやすらかに自分を待つ妻子に帰するものである。併し彼は同時に炎天のみちを思ひ、歩み疲れた自分を思つてゐる。「やすらかなる」と云ふうちにやはり或る憐れみをもつてゐる心がそこに見られる。そこに潜める暗い陰は日に背いてゐたあの日まはりの黒い葢のなかにも見られたのである。もう一遍それを眼に描き出してゐる作者は止むに止まれぬ不安を抑へて平静に生きてゆかなければならない。此の二首とそれから次への続きに作者の微細なる心理がかなり深刻に具象されてゐることを味ふに足りる。

牛の肉のよき肉買ひてうまらに煮子らとたうべむ心だらひに

な病みそ貧しかりともわが妻子米の飯たべただにすこやかに

強いて湧かうとする不安を抑へて平静のよるこびに浸らうと努める心がよく調子に出てゐることに注目しなければならない。それは言に擧げて自分と妻子とに話しかけてゐる調子である。声に出して之を言ふことによりて、生活に対する焦慮を打ち消さうとしてゐる態度に却つて作者のほんとうの心を知ることが出来る。私は思ふ。さうして此の平かに調子づけられた歌によりて此連作を読んだ處に、尚ほながく引続いてゆく平穩な餘韻が想はれて快い明るさの感じを与へてゐる。

十七

「向日葵」の連作の結構はかなり考慮を費されたものであることを私は想像する。そのなかの個々の短歌はよく鑑賞者の心の自然の推移を促して、作者のそれに融合することが出来るやうに、効果多く連ねてゐる。私は之を裏に擧げた齋藤氏の「死にたまふ母」に対比して多くの興味をおぼゆるのである。此の両者はその色調に於て著しい相異を示してゐる。「死にたまふ母」は感激に充ち叫びに満ちた熾烈なる表現をもつてゐる。そこには中心を貫く強大な感動によりてすべてを率ゐるすべてを追随せしめねば止まない力があつた。作者は一気に自分の思に觸れる儘を歌ひあげてゐる。それで宜かつたのである。之に反して「向日葵」は人間の心理にあらはれる繊細なる省慮を問題にして自分の生活に於ける或る諦念と慰安とを示さうとしてゐる。そこに生活に対する或る思想的解釈を含むであると云つてもいい。此のために其の表現は一氣であり得ないで寧ろ多く反省的なることは当然なのである。さうしなければ鑑賞者をして此の繊細な省慮を追随せしめる

ことは出来ないに違ひないからである。私は此の意味に於て「向日葵」の連作の價値を多く見つもり過ぎてはゐないと思ふ。

「向日葵」の連作がどうして作者の生活に深く立入つて吾々の眼のまへにそれが如実に現はれて来るかを落ち着いて考へて見なくてはならない。外形的な事件をならべて、またはそれに対する抽象主観を抒べて、それで生活があらはれてゐると誤信してゐる人々は殊に思を沈めて此の連作を味はつてみるがいい。米がかたくなつた。自分の生活は逼迫してくる。異國米をたべなくてはならないが病弱の子をどうしたらいいだらう。さう云つて直接に歌つてみたとする。作者の有つてゐる感想はそれでも説明されるであらうけれども、一人の人間が具象的に自然のなかに生きてゐるありの儘の姿はもつと複雑な動いてゐる雰圍氣に包まれてゐるのではないか。此の雰圍氣の動くままに彼の省慮がこまかに轉輾してゆくのがおのづからなことなのである。枯れ固まつた抽象には生命の真があらはれない筈である。私達は此の意味に於て包容された周圍のなかにありの儘の彼を見出したのである。そこに生活の真とあらゆる複雑さとが藏されてゐる。私たちはその自然の儘におかれた彼の生活と觸れたい。さうして彼のところに聴き入りたいのである。外形を捉へてそのいのちを取り逃がしたくないからである。祭の延びた街のうへに彼を立たせたとき、川口の橋のたもと向日葵の花に彼を向はせたととき、彼の生命は確かにその雰圍氣のなかに隠りてゐることが思はせられる。けれどその隠れた生命の姿をそれきりで現はさずにおいては何にもならない。「向日葵」の作者はやがて之れを適確に吾々のまへに展げて見せてゐる。私は此の連作を斯様に見ることによりて限りない深みをおぼえる。之れだけの深みをどうして個々の短歌によりてあらはすことが出来るであらうか。それを考へてみたときに此連作の芸術的價値を悟ることが出来るであらう。さうして又生活と最も密に關聯するとき芸術はその真を得たものであると信ずる人々に、どうしたなら此の目的に合致した作物を求められるかといふ問題に対して、或る解決の鍵を提供するものであると思ふ。自然描写の意義が上述の如くに解かれた時に芸術的に甚だ重要なるものとなる事も茲に附言したい。

十八

同じ作者の「夾竹桃」(アララギ第十一卷第十一号)は種々の意味に於て「向日葵」に似た連作である。私は此を前篇として彼を後篇として一の連作のなかに対立させて見ることによりて多くの興味を見出さうとするものである。「向日葵」に於て米騒動によりて自分の物質的生活を省慮した作者は、更に「夾竹桃」に於て老父の帰郷をおくりながら内的生活の寂しさを告白しようとしてゐるからである。

わが懶惰らんだを悔いつつもとな父母の寂しきことはよく知るものを

をとこの子ふたりながらに遠く遊びしかもつたなく世に生くるなり

老いぬれば父のこころの素直なりわれ働きてゆかざらめやも

うつそみはかなしきものを妻子らをいつくしめよと父はのらせり

彼が衷心から自らのいまの有様に悔をおぼえ、そのところが彼に向う老いたまふ父母に対する限りなき親しみを感じしめる自然さを私は之等の歌かた充分に観ることが出来る。さうして「向日葵」に示された諦念と慰安とを更に省慮しながら、やはり自らを責めてその諦念に安むずることの出来ないところと、慈愛の懐に隠れて之を肯定しようとするところとの複雑なる混交を示してゐることを、私は見通してはならないと思ふ。

わが家の米買う錢をさびしくも父にせまりて我が得つるかも

ほんとうに寂しい悔いごころであらねばならない。併し無心なおほきな自然は、父の慈愛のすがたと共に彼を慰めるに足りる。さうして彼はやはり

大川の水のおもにほふ朝づく日おのづからひらく素直のころを

といふ處に落ち着いてゆく。ここに彼のゆき逼らない裕かなる性格の暗示をも見ることが出来ると思ふ。

之等の意味で私は「夾竹桃」の一篇を「向日葵」と連ねることによりて深い内容を得たのである。只私は茲に斯の二篇の連續が最初から作者の企図になかつたであらうたために対立的の表現の整備が充分でないことを遺憾に思つてゐる。そればかりではない。「夾竹桃」の一篇は単にそれだけとして論じても、その結構に於て「向日葵」の作ほどに緊密でない處があつて、それが為に連作としての價値をよほどそこなつてゐることを惜しく思ふ。

秋づきて朝霧さむき街角に夾竹桃のはな赤く散りけり

朝あけの少公園われ立てり羽音やさしく鳩のおり來し

之等の歌のひそやかなる併し何処かに懐かし味を含むだ趣を私は作者の寂しさのなかに慰みをもとむる心にふさはしく共感することが出来る。さうして此連作を具象的にいろづけて深い自然さを思はせるに足りる。けれど斯う云ふ歌がもつと最初の部分にあつて欲しかつたのである。この親しい雰圍氣なしにあらはされた心象の直叙は餘りに骨だつて見える嫌がある。さう云ふことが單純にいけなると云ふのではない。一篇の前後の調和に於て缺くる處があるのを憾むのである。それから私には尚ほ、夾竹桃の赤い花や鳩のやさしい羽音に自分の心境を託した作者が、次のやうな歌に於て餘りに自分を忘れて事象のなかに冷かにのり過ぎてしまつた感があるのを否み得ない。

くれなるの夾竹桃の木ぬれより大きな蜘蛛一つさがりたり見ゆ

朝早み小公園の入口に鳩を刺したりあはれ鳥さしは

少くとも之等の歌の調律のうへに私はあらゆる敏感さをもつて、尚ほこの連作に於ける作者の倂を追隨するに苦しむのである。そこには只だ作者の官能のみが自分の内部から抜け離れて事象の細微たる描写に専らなる姿を見出す。外界の事物を自分の心象に浸してその繊細なるあらはれを如実に描くことに到り得なかつたからである。判り易く云へば氣分のあらはれが之等の歌に缺けてゐるのである。私はもとよりこの作者が斯様な心がけをもつてゐなかつたのだとは思はない。複雑な事実を短歌の内容とする場合にはそれを直叙するだけに既におほくの言が費されてしまふので、それ以上に之を取り容れた心の姿をそこに滲み出させることに極めて難かしいものであることを知らなければならぬ。併し短歌の詩形を守てゐる連作に於ては、各首の上に、この連作を通じて一つの纏つた形につくり上げられるべき思想若くは感情があらはれて居なくてはならない。さうして全体が同じ氣分に於て統一されてうかなければならない。そこに個々の短歌は連作中の一要素としての意義を明らかにすることが出来る。私はこの事を連作に対する極めて重要な問題として注意したいと思ふ。却つてそれらの中には全体に通ずる氣分が漲つてゐなければならぬ。換言すれば感情的に孤立してはならない。どうせ全体として見るのならば一首のなかにその感情があらはれなくとも前後を通じて観取せればそれでいいと云ふならば、それは或る意味に於て謬まつて居る。此の点に関しては長詩中の一句と、連作短歌中の一首とは程度に於て相異のあることを認めなければなるまい。短歌各首の内容として複雑なる事象の単純化が必要になるのは、主として上述の意味に合致しようとするものに外ならない。叙事的に単純化することによりてその内容のなかに作者の生命の姿をより深く鑄込まうと思ふところからなのである。